

日本スポーツ社会学会だより

第6号

1993.10.15.

- I. 諸報告
 - 1. 次回学会の開催について
 - 2. 『スポーツ社会学研究』編集委員会からのお知らせ
- II. 研究通信
 - 『身体の疵』
 - 『アイルランドにおける文化としてのスポーツ研究の可能性』
 - 『黄昏の国・イギリスにてーエリックとの出会い、そして研究ー』
 - 『体育学か、それとも社会学か?』
 - 『スポーツスタジアムを研究する楽しみ』
- III. Asian Sport Sciences Congress, Hiroshima '94 September 25-27, 1994
開催と発表者募集のお知らせ
- IV. 会員異動

発行 日本スポーツ社会学会事務局
〒305 つくば市天王台1-1-1
筑波大学体育科学系 スポーツ社会学研究室内
Tel./Fax. 0298-53-6370
振込口座 日本スポーツ社会学会事務局
宇都宮 9-43962

I. 諸報告

1. 次回学会の開催について

このたび、第3回日本スポーツ社会学会大会を別紙「大会開催要項」により開催することにしました。今回は、大会のお世話を愛知県の会員の方々にお願いしました。そして、大会の内容面においても「公開シンポジウム」を企画するなど新鮮味を加えました。

つきましては、皆様の参加をお待ちしています。参加・発表を希望される方は、大会要項により第3回大会事務局まで申し込んで下さい。

日本スポーツ社会学会長 井上 俊

2. 『スポーツ社会学研究』編集委員会からのお知らせ

会員間の研究上の情報交換と研究活動の活性化などを目的にして、前巻と同様、『スポーツ社会学研究』第2巻にも会員の研究業績リストを掲載する予定です。以下の諸点を考慮されまして、積極的にご自分の研究業績を申告下さい。

- ①内容がスポーツ現象の社会的側面について検討していること。
- ②1989年以降に公表された印刷物であること。(但し、前回に申告されなかった会員は1988年の業績も含めてよいことにします)
- ③会員は、『スポーツ社会学研究』第1巻の105項から109項に掲載されている書式に従って研究業績を申告すること。
- ④会員は、自分の研究業績を「著書・編著」、「翻訳」、「論文」及び「報告書」の4部門に大きく分類し、さらに論文については、以下の「10の下位部門」に細分化して申告すること。
 - (1)理論・学説・思想 (2)研究方法 (3)パーソナリティ・社会心理
 - (4)文化 (5)集団・組織 (6)教育 (7)政治・経済・労働
 - (8)社会変動・歴史 (9)社会問題・社会計画 (10)その他

特に、③の書式は厳守して下さい。

提出期限は、編集作業の都合上、1993年11月15日とします。

提出先は、〒630 奈良市北魚屋東町 奈良女子大学文学部 江刺正吾 宛
にお願いします。

Ⅱ．研究通信

『身体の疵』

今春、転勤で鳴門から宮崎へ移ったのを機会に、『老年世代のスポーツとライフコースの研究』と題する小論を書いた。この7年間、剣道の仲間に加えてくれた高齢者の方々から折りにふれて聴き出していたことを彼らの「戦後生活史」として記録したものである。戦後、長いブランクを経た上でカムバックした彼らの剣道の経歴には、戦争の疵跡が深く刻み込まれていることが書かれてある。

ところで、今回の小論には書けなかったが、戦争の疵跡は、単に彼らの剣道の経歴に止まらず、稽古しているときの身体にまで深く及んでいた。不覚にも、このことに気づくのは、稽古仲間として認知されて2年も経ってからだ。新しい土地に馴れると共に、そろそろ限界も感じ始めていた頃、「少しでも稽古の量を稼ぎたい」という私の魂胆で始めた朝稽古も、疲労のためか次第に休む人が多くなり、梅雨に入る頃には到々、私とSさんの二人だけになってしまっていたときのことだ。

当時のSさんは、念願の六段を取得して稽古に燃えていた。だが、地力のほうはもう一つで、動きを止め、剣先を張って間合いを詰めながら<気>を当てると、すぐに手が出てしまい、いつも私との稽古では、一方的に打たされ消耗していた。そんなSさんにとって二人だけの稽古は、余程大きな心的ストレスになっていたであろう。次第にSさんは不機嫌になり、やがて二人の間には、まったく会話が途絶えてしまう。「おはよう」「ごくろうさん」の挨拶さえなく、ただ黙々と稽古して帰っていくという、とても信じられない光景が繰り返されていたのである。

意地の張り合いは夏まで続いたであろうか。7月も半ば、六段の審査に受からず、2カ月近く休んでいたKさんが戻ってきた。稽古の後、Kさんが「もう六段は受けん」と語ったときのことである。私が「そんな悲しいこと言わんと、70のYさんでもやっているのに」というや否や、Sさんが激しい口調で「30年のブランクは残酷じゃ」と言い放ったのである。一瞬、事態が飲み込めなかったが、やがてそれが、戦後、生きるために剣道を止めざるを得なかった二人の厳しい現実を指していたことに気づき、愕然とするのである。

SさんやKさんのように、長いブランクを経験した人にとって、カムバックするまでにすっかり老いてしまった身体と、その老いた身体に記憶されている若い頃の剣道の技法との間にある落差は、癒し難い疵である。この身体に刻印された疵に気づいたとき、一時私は、彼らの身体を打つことはおろか、竹刀を交えることさえ苦痛になっていた。

事実と解釈

2年前の京都剣道祭で、互いに一度も打ち合うことなく、まったく静止したまま勝負をおさめた八段範士の仕合いがあった。その直後から、剣道家の間で、その仕

合いが「相抜け」だったかどうか、の喧喧諤諤の議論が続いたことを覚えている。

剣道の世界には、「打って勝った」という「身体性」(事実)を残さず、理想としては勝敗の決着まで観る(解釈)という、完璧なまでの道徳性がある。仮に打ったとしても、それは、<気>の陰にある「心」(影)を確かに打ったものでなければならぬ。こうした事態は、「身体性の脱落」を極限まで突き詰めた者だけが感知できる深層次元のことであり、剣の修行とは、生涯かけて「日常的な身体」を、こうした「身体性」を脱落させた「非日常的な身体」に仕上げる夢をかけた実験だ。

こうした実験は、誰もが成功するわけでもなく、むしろ殆どの人が途中で挫折する。私もその一人だが、「身体性の脱落」を極限まで突き詰めることはできなくとも、<気>の働きの何たるかは、いくぶん表層レベルでも実感できる。問題は、自己の身体の「老い」を見つめ、「衰え」に逆らわずして、いかに剣風(身体の技法)を変えるかにあろう。

乱暴な言い方だが、身体の動的機能を最大限に発揮して「打った」という事実を残すのが、現代のスポーツ化した試合剣道の目的だ。しかし、我々は、いつの日にか、こうした「身体性」から離脱しなければならない。「いま、ここだ」と思った瞬間に身が躍動していたはずだが、どれだけ鍛錬を重ねても「打てないとき」「事実を残せないとき」がやってくる。悔しいが、分かっているのに身体が動かないのである。

スポーツの世界ならば、ここで現役の引退だ。ところが、剣道の世界では、ここからが「武道」としての真の修行が始まるのである。「身体性」が勝っている間は容易に受け入れられないが、そこでは、老いることさえ意味を持っている。一度「身体性」の意味を徹底的に見極め、それを土台にして徐々に、身体の回路を単に「打った」という事実への志向性から、<気>を働かせて「いかに打つか」「いかに打っているか」の解釈へのそれへと組み替える長い行程が始まる。

剣道の世界では、よく「気を練る」とか「地を鍛える」とかいう言葉を耳にする。これは、<気>と身体の関係が<地>と<図>のそれにあることを言い当てている。問題は、どれだけ<気>を練り、どれだけ<地>を鍛えるか、そして最終的には、どのような性能を秘めた「闘う身体」すなわち「解釈できる身体」を作り上げるかにあり、<気>のない剣道(身体)や<地>のない剣道(身体)は、絶対に逃げるできない「闘いの場」では直ちに、馬脚を現してしまう。

Sさんにとっての不運は、生きるためとはいえ、30年もの長きに渡って大切な「とき」を奪われ、「老い」と対話しつつ徐々に、可能性を秘めた身体に練り上げることができなかったことにある。

象徴的対話としての剣道

勝負を決める本質的要件の一つが、相手の構えを崩す力である。すなわち「崩し」とは、<気>の働きで動かないものを動かす主体の働きだ。「解釈できる身体」は、こうした能力(崩し)を駆使して、自分は動かさず、また動かされず、相手の心(影)

を露にさせる性能を秘めた身体だ。

SさんとKさんの稽古を観ていると本当に疲れる。互いに間が詰まるや否や、(ここで本来なら<気>と<気>の攻めぎ合いの妙味を体得するのだが)、途端に「攻め」も「崩し」もなく、まったく志向性のない身体だけが勝手に反応し、まさに「軍鶏」(シャモ)の喧嘩のごとく遮二無二突っかかってくるのだ。剣道では古来、いざ闘いの場に臨んで「恐懼疑惑」といった人間の本質的な心の病いが現れることを「四戒」として、最も諫めてきたが、こうした<気>のない剣道はすぐに、本来<気>の陰に隠れているはずの心(影)の病いが露出してしまふ。

このように剣道を見つめてみると、勝負の場では、いつになっても他者とは自己の実存を脅かす「敵」であることを実感する。我々は、「競争」や「共同」という近代的な概念を手にしてきたがゆえに却って、人間でも動物でもない「ヒト」の闘いの原像が見えにくくなっている。しかし、剣道から<死>のリアリティが喪われ、近代に至るまで限りなく<死>は象徴化してきたといっても、「打たれるのではないか」という恐怖(心の病い)が惹起する攻撃の対象は、やはり「敵」なのである。

このように考えることによって我々は、剣道の世界に、その彼岸に<死>のリアリティを感知させ得る様々な恐怖が、表層から深層にかけて、ハイラーキカルなく意味の層>として仕掛けられていることに気づく。山口昌男氏の言葉を借りれば、最も忌み嫌われるはずの<死>や<恐怖>でさえ、「魂の成長を促す独特の仕掛」「より包括的な精神の宇宙を生きる可能性」(『病いの宇宙誌』)として与えられている。人は、そうした恐怖と象徴的に対話することを通して「一体自分は何者なのか」「自分は何者たり得るか」を知り、新しい<生>を実現できる。

明治の近代に完成させた鉄舟の「千四百面立ち切り稽古」や我々の受け継いできた「懸かり稽古」は、そうした新しい<生>を産むための文化の仕掛すなわち「イニシエーションの儀礼」なのだろう。

根上 優(宮崎大学)

『アイルランドにおける文化としてのスポーツ研究の可能性』

平成4年10月1日より平成5年5月31日まで8カ月間、私はアイルランド政府の奨学金を受けての文部省在外研究員として、首都ダブリンにある、University College Dublinの社会学科で研究生活を送った。我が国において、アイルランド共和国に対する一般の人々の認識はとても低い。私のアイルランド行きが決定したとき、様々な人や学生にそのことについて話したが、「アイルランドですか?」とか「ああ、あのイギリスの一部ですね」といった反応が少なからずでた。また北アイルランド問題に関するIRAの爆弾テロが連想されるのか、「とても危険なところではないですか?」といったことも尋ねられた。実際、北アイルランド(イギリス領)の首都ベルファストでのカトリック系住民とプロテスタント系住民の抗争によ

る殺人事件や爆弾テロ騒ぎに関するニュースを、ダブリンで殆ど毎日耳にした。しかし南のアイルランド共和国はこの上もなく平和な国で、日本より治安が良いのではと思うほどであった。面積は北海道と同じ位の小さな国だが、人口は300万人であり人々はスペース的にゆったりとした生活を享受している。全人口の3分の1が首都ダブリンに集中しており、ダブリン以外の都市に行くと、本当にのんびりとした生活風景に出会う。

私が滞在したUniversity College Dublinは、ダブリン市の郊外に位置し、とても広々としたキャンパスを持ち、ラグビー場だけでも裕に10面とれる程であった。アイルランドを在外研究先として選んだ理由は長い間イギリスに占領されていた歴史を持ち、文化的にも強い影響を受けている一方、アイルランドの伝統文化も綿々と生きづいていくという複雑な状況に興味を持ち、文化としてのスポーツ研究の可能性を感じたからである。アイルランドにおいては、スポーツ社会学とカテゴリーズされた体系的な研究は未だに行われていない。社会学の分野において断片的にスポーツが扱われている状態にとどまっている。従って国際スポーツ社会学会に登録している研究者もいない(私が調べるかぎりでは)ので、受入先決定に多少苦労したが、社会学科が一番充実しているU.C.Dを選び、私の研究に興味を示してくれたDr.Cyril Whiteが私の受入先の教授になった次第であった。Dr.Whiteは、かつてアイルランド屈指のラグビー・チームの名ウイングとして活躍したこともあってか、社会学におけるスポーツ研究の必要性を強く感じている人で、私の研究に対して多くの貴重なサジェスションをしてくれた。彼は、ラグビー・ユニオンは勿論のこと、多くのスポーツ組織、そしてスポーツ・ジャーナリストにネット・ワークを持っており、そのお陰で様々なキー・パーソンのインタビューをとることができて幸運であった。研究において、具体的には2つのスポーツ組織を取り上げた。それは、GAA(Gaelic Athletic Association)とIRFU(Irish Rugby Football Union)であった。以下に、この2つの組織の特徴について簡単に触れてみたいと思う。

・GAA(Gaelic Athletic Association)

1884年に創設された、ゲーリック・ゲームス(アイルランドの伝統スポーツ)を統轄する競技団体である。ゲーリック・ゲームスの主な種目としては、ゲーリック・フットボールとハーリングというスポーツがある。ゲーリック・フットボールは、サッカーボールとほぼ同じボールを使い、プレーヤーは手で運ぶか(5歩以内)、キックやパスによってボールを進め、最終的には、相手陣のラグビー・ボールとサッカー・ゴールが一体となったようなゴールのラグビー・ボールの間に蹴り込む(1点)かサッカー・ゴールの中に蹴り込む(3点:ゴール・キーパーがいるのでこちらの方が難易度が高い)というゲームである。ゲーム形態としてオーストラリアン・フットボールと非常によく似ていて、そのルーツとなった競技ではないとも言われている。ハーリングはゲーリック・フットボールとゲーム形式(得点方法)的には、殆ど同じであるが、ボールの代わりに、フィールド・ホッケーのスティック

とパックに非常によく似た道具を用いて行なわれる。選手は危険防止のためにヘルメットを着用するが、スティックを持って闘うだけに、ゲーリック・フットボールよりはかなり危険であるように見受けられる。両競技とも、ある程度の身体接触が許されている。春から夏にかけて、この二つの競技のオール・アイルランド・リーグ（それぞれのカウンティの代表チームによって争われる）が行なわれ、アイルランド中が熱狂する。決勝ともなると、6～7万人収容のスタジアムが満員となる名実ともにアイルランドで一番の人気種目である。しかしGAAは、その創設当時から順風満帆に発展してきたわけではなく、様々な政治問題との関与を余儀なくされてきた。創設者Michael Cusackは、当初純粋なスポーツ組織の形成を目指していたが、イギリスによる占領当時のアイルランド伝統文化復興（アイルランド語復興の運動と連動した）の運動と相呼応し、次第に政治色が強まり、組織の運営においてIRB（Irish Republican Brotherhood）というアイルランド開放を目指していた政治結社のメンバーに組織の重要なポストを占められるようになっていった。その後の活動においてゲーリック・ゲームスの発展に寄与したことは勿論であるが、アイルランド伝統文化保護を目的とした排外主義的（特にイギリス文化に対して）な方向性が強化されていった。実際1970年まで、GAAに登録している選手がイギリス的スポーツ（特にサッカー、ラグビー、クリケット、ホッケー）をプレーすることを禁じてきた。現在こうした方針は軟化されてきたが、今だに保守的な性格は持ち合わせていて、ダブリン市内の7万人近く収容できるクローク・パーク・スタジアムに対するサッカー協会やラグビー・ユニオンの使用要請に対して拒否し続けている。こうした姿勢に対してアイルランド政府も難色を示しており、助成金削減等の方針を検討している。このようにGAAの歴史は、アイルランドの複雑な政治、文化状況と関連し非常に政治色の強いものとなっている。

・IRFU（Irish Rugby Football Union）

国際試合に参加する際、サッカーを始めとする多くの種目においては、イギリス領の北アイルランドと南のアイルランド共和国からは別々のチームを出す。ラグビーに関しては1879年のユニオン創設以来、統一チームを組織してきた。プロテスタント系住民とカトリック系住民との抗争により国家を分裂せざるを得なかったのであるが、IRFUは国家より民族的アイデンティティを優先させた形で、数々の危機的状況（独立戦争や内戦）にも関わらず、統一チームを維持し続けてきた。アイルランドのラグビー史に最も精通している一人であるアイリッシュ・タイムズ紙のラグビー記者であるEdmund VanEsbeckは、彼の著書（The History of Irish Rugby）の中で、こうしたアイルランド・ラグビーの局面を評価し以下のように述べている。「IRFUは100年以上にわたって、異なった4地区のアイルランドの人々を共通の目的、つまり競技力向上のために結集させてきた。これは後の世代の政治家たちが惨めにも失敗してきた分野であったので称賛に値する。特に近年におけるアイルランドのラグビー・ユニオンの成功と競技の発展は、アイルランド人の生活における最も素晴らしい社会学的要素の一つである。」この言葉に私の今後のIR

FUに関する研究の方向性が凝縮されている。

・結びにかえて

以上簡単であるが、アイルランド共和国における2つのスポーツ組織が、アイルランドの文化史の中で、政治的エンティティ及び文化的エンティティとして機能しているアспектについての概略及び私の今後のアイルランド研究の方向性についてまとめてみた。現在アイルランドで収集してきた莫大な資料と格闘中であるが、幾つかのものはアイルランド語で書かれているので、整理に時間がかかりそうである。しかしまともな次第、もっと詳細な形で報告を行ないたいと考えている。最後にアイルランドに関する個人的印象を簡潔に述べたいと思うが、とにかく人々がフレンドリーであるのが印象的で、本当に住みやすい国であった。心配されたアイルランド訛りの英語であるが、ダブリンで話されている英語は世界で一番きれいな英語だとアイルランドの人々が豪語しているのは決して誇張ではなく、スタンダードな英語に限りなく近いものであるように思えた。失業率はECの中で一番高く、経済的状态は決して良くないが、ヨーロッパ諸国のなかで一番自殺率の低い国として知られるように、人々は本当によくしゃべり日常生活を本当にエンジョイしている国である。本当の豊かさとは何かを考えさせられた8カ月間でもあった。

海老島 均（高松工業高等専門学校）

『黄昏の国・イギリスにて —エリックとの出会い、そして研究—』

昨年のちょうど今頃（1992年10月2日）、私はロンドン・セントパンクロス駅からインターシティ（都市間高速鉄道）に乗り、1時間半ほど北にあるレスター駅である男性を待っていた。しばらくすると見事な白髪の中年紳士が、小さなブルーのフォード車からその大きな体をいかにも窮屈そうに折り曲げて出てきた。大きなパイプをくわえ、片方の足を引きずりながらゆっくりとこちらの方に近づいてくる。Hello! Dr. Koichi KIKI!! —オレの名前はキキじゃない!—と思うまもなく、彼は手慣れた動作で私に握手を求めてきた（キクという発音はどうもイギリス人にとっては難しいらしい）。それが、私が大学院時代に最初に授業で購読し、学位論文を書くきっかけを与えてくれた“Barbarians, Gentlemen, and Players”の著者、エリック・ダニングとの最初の出会であった。

エリックは私が来る1カ月前、自らがヘッドとなってレスター大学社会学部に付属するCentre for Research into Sport and Society（CRSS）という研究機関を設立したばかりであった。スタッフは、エリックをProfessorとしてSenior Lecturer 2名、Lecturer 1名、Course Coordinator 1名、秘書3名（パートを含む）、Computer Programmer 1名、パート職員1名、EC研修生2名の計12名である。4名の研究者に対してCourse Coordinatorを含めた

4名の秘書、その他の研究アシスタントが4名という、日本では考えられない豪華なスタッフである。エリックを中心とする研究者たちは、イギリス・スポーツ界の恥部として悪名高い「フットボール・フーリガン」を中心とするスポーツと暴力の問題に長年に渡って取り組んでおり、すでに4～5年前からフットボール・トラスト（協会）による年間億単位（円）の補助金を得ていた。イギリスでは産学共同による研究は半ば常識化しており、優れた研究をしたければ、内外にその業績をアピールし、関連企業がそれに資金を提供することが奨励されている。われわれ日本の研究者としては、それで果して基礎研究を含めた公平な資金援助が可能なのかという疑念がわくが、経済状況が逼迫し政府援助（公金）に多くを期待できない彼らの研究環境では、それも致し方ないといったところが本音であろう。しかし、毎月発行される大学ニュース全体の3～4ページ分を占める「資金援助欄」を見てみると、理科学系（science）の基礎研究はもちろんのこと、哲学、歴史学などの分野に対しても幅広く援助が行われている様子が見えてくる。後者の資金提供者は、博物館協会などの公的法人が多数を占めているようであるが、良識ある資金の提供と適度な研究競争が、イギリスにおける良質な研究成果を生む契機となっているといった言い過ぎであろうか。

CRSSでは、主に3つの事業が展開されていた。メインの1つはMaster of Artsの称号を授与することができる修士課程で、週2回各2時間の授業が行われる。もう1つのメインはMaster of Scienceの称号を授与することができる通信教育事業で、これはイギリス国内、EC諸国はもとより、インド、マレーシア、香港などにも受講生を持っており、スタッフは年に1回スクーリングに出かける（近く、日本への進出も考えているらしい）。その他、フットボール・トラストなどからの委託調査の請負いがあり、これは主に若手を中心とするアシスタント・スタッフが担当する。

さて、イギリスにおける「スポーツ社会学」の授業の1つとして、彼らが行っている修士課程の授業内容を見てみよう。まず、全体のテーマが「スポーツの理論」「近代スポーツの構造と発達」「現代スポーツの諸問題」の3つに分かれ、全時間の半分が「スポーツの理論」に向けられている。この「スポーツの理論」の授業では、例えば次のようなテーマが取り上げられていた。「スポーツ社会学の視点」「フィギュレシヨナル社会学の紹介」「社会学的研究における価値の役割」「マルクス主義」「スポーツへのマルクス主義的アプローチ」「機能主義」「スポーツへの機能主義的アプローチ」「相互作用主義」「スポーツへの相互作用主義的アプローチ」「フィギュレシヨナル社会学」「スポーツへのフィギュレシヨナル的アプローチ」「スポーツへのフェミニスト的アプローチ」「スポーツへのウェーバー的アプローチ」「スポーツへのデュルケムのアプローチ」「スポーツへのアプローチの比較：マルクス主義対機能主義」「スポーツへのアプローチの比較：フィギュレシヨナル主義対マルクス主義」「スポーツへのアプローチの比較：フィギュ

レシヨナル主義対相互作用主義」…などである。一見してわかるように、この授業では社会学理論の理解を踏まえた上で（基礎）、それらの理論を応用したスポーツ現象への理解の仕方を論じ（応用）、さらに応用されたスポーツ理論の比較検討（論争）にまで発展させている。また、さらに注意深くテーマの配列の仕方を見ると、彼らが依拠するノベルト・エリアス（英語ではエライアスと発音）が提唱した「Figurational Sociology」の理論的優越性を主張するために、最初にその紹介をし、その後その他の理論の長・短所を紹介しながら短所を克服する切り札として「Figurational Sociology」の理論的特徴を印象づける戦略をとっている。所謂「エリアス学派」と称せられるこの理論の詳細な特徴については、ここではとても論じきれないので他の機会に譲りたいが、それが現代社会学を悩ませている認識論的二元論、存在論的二元論—行為と構造の円環—を克服するために、相互依存的な人間同志の網の目としての「形態（figuration）」とその「形態」を構成する過程的で、開かれた「他者指向」的な性格を持つ相互依存的な諸個人概念を用意していること、その相互関係は究極的には権力関係の分析に向かわざるをえないが、その分析には徹底した関係概念に基づく相対的で内生的なダイナミズムが重視されることなどが指摘される。私は、ある時彼らの講義を聴きながら、そのアイデアがブルデューが唱える「構造、ハビトゥス、プラティーク」のそれに非常に近似しているのではないかと質問したところ、エリックは平然とした顔付きで「それらについては、すでにエリアスが提唱しており、何らの新しさをわれわれは感じていない」との回答であった。むしろ、彼らは講義の中で、彼らの概念をより一層発展させるためにはデュルケム理論の再解釈を行う必要があること、その意味でA. ギデンズの「構造化」の理論、「構造の二重性」への解釈学には傾聴すべきものがあるが、彼のリアリズムには悲観的な要素が多すぎるとして彼の理論をも克服する必要があることを説いていた。

とにかく、エリアス学派の英語圏における裾野はわれわれが考えている以上に広いと思われる。私が滞在している間にも、オーストラリア、カナダ、オランダなどから、ある時は「ユダヤ人の虐殺問題」をテーマに、またある時は「食行動のマナー」をテーマにといったように、幅広い課題に対するエリアス学派の理論的適用を求めて研究者がやってきていた。われわれスポーツを対象とする研究に対しても、エリックが展開しているスポーツと暴力問題以外にも様々な応用範囲が考えられるように思われる。エリック自身も、その範囲の拡大の可能性を示唆していたし、期待しているようでもあった。私の研究に対しても、スポーツのプロフェッションを文明化過程の基本的なアイデアを用いながら概念化し、西洋文明の中のスポーツの「発達」概念を徹底的に相対化することによって比較研究が可能なのではないかと示唆してくれていた。

シュンペーターの予言した「西欧の没落」の先頭を切っているかのような国イギリス—失業者は300万人を超え、夕方には街中がゴミで溢れるように公衆道徳

が廃れ、若者が物乞いをし、皇室スキャンダルに揺れ、政治的混迷を深めている黄昏の国。まさに「日、没する」感のあるこの国で、まだまだわれわれが学ぶべき多くの学問的遺産と発達がこの国には存在していることを実感させられた、そんな滞在であった。

菊 幸一 (奈良女子大学)

『体育学か、それとも社会学か?』

たぶんこれからも変わりはないと思うが、これまで私は一貫して、2、3年ごとに調査対象者を確定し、多様な角度からスポーツ現象を解明するモノグラフィックな社会調査を研究の方法としてきた。ところが、そこにはいつも調査項目の信頼性や項目全体の体系化について、少なからず自らの研究方法に疑念と息苦しさのようなものを感じていたように思う。性格診断等を主軸に据えた心理学領域の社会調査は、項目の信頼性や体系についての検証過程が明確であるし、多変量解析による統計的妥当性が要求される研究の広がり、正直息苦しさの原因の一つでもあった。つまり、ある問題現象のしくみを測定しようとし、調査対象者向けの測定項目を一応粘り強く吟味し、つくりあげているわけだが、ときには研究者の社会現象に対する主観的な想像力が項目内容に反映されていることが多い。したがって、研究者間で想像力という私的観念に大きなへだたりが生まれれば、項目内容の信頼性を何によって明らかにすべきなのか、あるいは項目抽出の背景にあるものはいったい何なのか、そうした疑念を埋め合わせる見解を見いだすことはきわめて困難であったように思う。

もちろん、研究者間のへだたりを埋め合わせる見解についての議論過程に社会学研究の本質が存在するとは思ふ。しかしながら、事実毎年、スポーツ現象を解明しようとする膨大な量の数量データが示され蓄積されているはずなのに、議論過程の依りどころとなる研究者の問題意識を、ある言葉(概念)によって、凝縮し表現(モデル化)しようと工夫されたものは少ないし、私自身の研究もそうであったと反省している。

さて、もともとスポーツ社会学は、社会学の大枠的な領域に集束される性格のものであったから、社会学の一般理論に依拠することは当然のことでもあったろう。しかも依拠したことによるスポーツ社会学研究の発展は著しかったとも言える。

ところが、「総合科学」的な色彩の強い保健体育学の一領域として、スポーツ社会学をとらえようとするならば、体育・スポーツの社会現象は人間社会にとって「必然性」のあるものとしてアピールすべきことに気づく。要するに、体育学という大枠的な領域に集束されるべきスポーツ社会学であり、言い替えれば、「体育学とは何か?」を究極的に問うスポーツ社会学であるということ。(これは今日の大綱化に伴う保健体育科目の存在理由を議論しようとするときの重大な関心事で

あるように思う) さらに言わせていただけるならば、人類学、社会学、歴史学の研究者が集まろうとしているスポーツ社会学会は、人間社会にとって「必然性」を有するものである体育・スポーツ学の独自性をスポーツ社会学の研究者が大いに主張すべき場であって欲しいし、私もこれに向けて葛藤を繰り返し続けたいと思う。

私は、こうした葛藤と闘いつつ、体育学としてのスポーツ社会学のモノグラフィックな社会調査を追究していきたい。そのためにはスポーツ現象についての問題意識を凝縮した形の言葉で記述し、しかもモデルで図示して表現したいと思う。もちろんこれはスポーツ社会学独自の概念であったり、フレームであったりすべきで、スポーツ文化を象徴的に記述できることが望ましいであろう。また、スポーツ文化と他の文化の差異化を図る研究への着手と、それらを判別できるスポーツ社会学独自の記述が求められよう。さらに今ある現実や現象の解明だけでなく、将来的なスポーツ現象を推測し、それらをモデル化しながら、モノグラフィックなデータを抽出し、施策や解決策を提案し得るレベルにまで高めていきたい。その際、モデルはできる限り単純化し、しかもスポーツ文化とそれ以外の文化を差異化、判別できるもので、そこに研究者の思想を強烈に盛り込み議論できれば、少なからずも、一歩一歩体育学としてのスポーツ社会学の写像が浮かび上がってくるのではなからうか。そうしたモデルを研究者間で持ちより、スポーツ社会学研究の発展の議論の依りどころとなればと思う。

最後になるが、8月9日から20日間、カナダオンタリオ州のトロント大学に滞在した。社会学者のJ.H. Simpsonは、「SchoolだけのPhysical Educationになる可能性があるよ、今のスポーツ研究はキネシオロジーなんていう名称に統一するんじゃないの?」と、笑って言ってたけど.....。

水上 博司 (三重大学)

『スポーツスタジアムを研究する楽しみ』

朝日新聞の投書欄の特集に“Jリーグの観客に一言”というのがあった。その内容は主にサポーターの若者に対する提言で、とにかく騒ぎすぎで、これではじっくりとゲームを見ることができないから席を分離しろとか、もっとサッカーを見るべきだ、グラウンドと一体になっているつもりで、実はサッカーの質を落としているから何もならないなどというものであった。この読者のこうした声を社会的にはどのように読むことができるのであろうか。さしずめフランスの「社会学研究会」であったなら、現代の祝祭空間における「まじめ・不まじめ」、「生産性・非生産性」などを軸とする「聖」-「遊」の対立図式で解釈されたかもしれない。また、「ヨーロッパ社会学センター」ならば、「プラチーク」-「アピチユス」に現れた、スポーツの意味解釈をめぐる争いの体系を見通すかもしれない。「観察的参加者」たるアメリカの社会学者ならば、幾重にも重なる「フレーム」の書き換えによって、

その出来事を解釈する人々の様々な「集まり」と見抜いたかもしれない。このような解釈は‘なるほど、そうか’と納得できる点がある。実際に以前、南フランスのある都市のサッカーの観客をこうした視点から観察してみたことがあるが、‘なるほど、そうか’であった。しかしひとつ、なんとも不可解なことがある。それは、こうした数万人も集まるスタジアムの空間を「見るスポーツ」の空間と簡単に理解されているということである。現実にはスタジアムを覗いてみると、単純に「見るスポーツ」とかたづけられないことは明白である。レフェリーによって裁かれる選手のラフプレーに同調した観客の暴力が警察によって裁かれる。ゲームの勝敗よりも売り上げが心配なビール売りがスタンド中に散っている。ゲーム中に特別席の紳士、淑女がスタンド裏のバーで社交の場を作り上げている。こうしたことは「見るスポーツ」ではほとんど語られていない。どうも我々は余りにも簡単に「見るスポーツ」という言葉を使ってきたのではあるまいか。このことはそのまま「スポーツ」という言葉まで拡大していく。こうしたところから一つの提案を試みたい。それは「スポーツ」という言葉を一端、疑問符とともに括弧に入れて考えてみる。つまりスポーツの「脱構築」という作業を試みるのはどうであろうか。「スポーツ」の世界を在るものと前提するのではなく、「世界の複雑性」の中での意味として「スポーツ」に着眼してみるのである。つまり人は「スポーツ」の存在を疑うことなく、それに行動や体験を結び付けて秩序づけている。しかし結局のところ、すべての人は‘のようなもの’という言葉に常に携えているのである。さきに挙げた3つの解釈は共に‘スポーツのようなもの’に向けられた視線ゆえに‘なるほど、そうか’なのであろう。こうすることで例えば‘個人の身のこなしを言語化するために「スポーツ」の意味が使われる’とか‘ある出来事を誰がどのように、「スポーツ」の意味に捉えるかで「スポーツ」の存在は決定される。’といったような風変わりな命題も飛び出してくる。この命題の論議は別の場所にゆずるが、いずれにしろこのように一端、括弧に入れてみることで、不可解な「見るスポーツ」という理解も脱「スポーツ」のスポーツ社会学の問題として非常に面白くなる。それよりもまして、このスポーツスタジアムという空間の埋蔵量が多大であることがわかるのである。さて今後、主体論が出てくるのやら、身体論が出てくるのやら、はたまたシステム論が出てくるのやら、発掘の方法はととても楽しみである。

加藤朋之（筑波大学研究生）

III. Asian Sport Sciences Congress, Hiroshima '94 September 25-27, 1994
 (Organized by Organizing Committee of Asian Sport Sciences Congress Hiroshima '94 and Japan Olympic Committee 開催と発表者募集のお知らせ
 大会組織委員会から日本スポーツ社会学会長あてに大会要項が送られてきました。今回は、下記のテーマで行われます。参加、ならびに発表したい方は、直接、組織委員会に連絡を取ってください。

SCIENTIFIC PROGRAMS

Main Theme

The Most Advanced Technology in Sport

Congress Topics

- ①Biological Science ②Medcal Science ③Physical Science
 ④Psycho-Sociological Science ⑤Historical,Philosophical Science

Congress Sections

- ・ Key Note Address:by one or two invited speakers for each topic.
- ・ Poster Presentations:all papers submitted will be presented in posters.
- ・ Special Communication:VTR presentation made by some companies on product related to the most advanced technology in sports.
- ・ Exhibits of Research and Sport Equipments.

Call for Papers

Abstracts must be submitted for all poster presentatins. Each person is permitted to submit and be first author on only one abstract. Abstract will be reproduced photographically exactly as received. Therefore, please follow instructions carefully.

Deadlines

Abstracts must be received,not postmarked,by April 10,1994. Do not fold your abstract, and mail flat with cardboard to prevent possible damages. Select one topic from the congress topics for your presentation. Abstracts will be included in the program only after receipt of a full registration fee from the presenting author by April 10, 1994. Send the original abstract with THREE COPIES to

: Secretariat of Asian Sport Sciences Congress, Hiroshima '94
 Kishi Kinen-Taiikukan, 1-1-1 Jinnan, Sibuya-ku
 Tokyo 150, Japan

IV. 会員異動('93.9現在)

<新規会員>

氏名	所属	住所
馬場哲雄	日本女子大学	

黄順姫 筑波大学

<住所変更・所属変更>

大沼義彦 北海道大学

加納弘二 武蔵丘
短期大学

土井隆義

長見 真

中村祐司 宇都宮大学

長屋昭義 兵庫県立
看護大学

前田博子 鹿屋体育大学

渡辺 潤

<訂正>

会員の住所・電話番号の表記に誤りがありました。お詫びを申し上げるとともに、以下のように訂正いたします。

前田和司

吉田 毅

【編集後記】

お忙しい中、研究通信をお寄せいただきありがとうございました。今回は、海外留学をされていた会員の方に御登場願いましたが、このほかにも夏休みを利用して海外で活躍された方も多くいることと思います。次号も海外の情報を多く入れたいと考えています。学会だよりも載せたい情報があれば、どしどし送ってください。毎回手伝ってくれている院生の橋本、岡田、瀧本君に感謝します。(清水 諭)

